

〔資料紹介：狩俣の神歌フサ〕

## nisinja:-mutu-nu-fusa ニスニャー・ムトゥのフサ

本永 清 (元宮古島市総合博物館協議会会長)

今は行われなくなったが狩俣集落（以下、狩俣村と称す）の uja:n（親神＝祖神）と総称される祭祀の第5回 tudja:gi（閉じ上げ＝最終回）という行事の5日目、pīma-nu-mandza（昼の万座）と称する一連の儀礼の中で、草装・木装した神女たちがその籠もっていた聖林 ni-sima（根島）から人里 suni（宗根＝国）、別称 nja:ku（宮古）に降臨するとその祭場の一つである nisinja:-mutu（西家元）の前庭で輪を作り、中央に立つ神女 tsikasa-gam（司神）の先唱で三編一組の神歌 fusa（草）を歌って輪舞するという場面があった。uja:n 祭祀では神女＝祖神と見なされていたことから、この場面でも神女たちはもちろん、その仕える祖神 uja:n に成り代わって、つまり同神の化身として、この fusa を歌っていたことになる。fusa の内容は、したがって主に祖神 uja:n たちの世界での出来事である。以下、その三編一組の fusa の歌詞を順次、それぞれ語釈、対訳付きで紹介する。なお、fusa は三編ともそれぞれ曲は異なる。

## 1. harai-gui（払え声）

【原 歌】	【対 訳】
1 tindau-nu umju:pu:gi harari harari	ティンダウ（神名）の おかげで 払え！ 払え！
2 jagumju:i-nu umju:pu:gi	畏敬する 上（神）の おかげで
3 ju:-mutu-nu kam-mjo:	四ムトゥ（拝所名）の 神よ。
4 ju:-nibi-nu kam-mjo:	四ニビ（同上）の 神よ。
5 mma-nu-kam umju:pu:gi	ムマヌカム（神名）の おかげで
6 usiba-nusi umju:pu:gi	ウスバヌス（神名）の おかげで
7 ma-kjan-nusi umju:pu:gi	マキャンヌス（同上）の おかげで
8 tsikasa-gam wan-na	ツカサガム（神名）の 私は
9 mattfa-gam wan-na	マッチャガム（同上）の 私は
10 mma-nu-kam umju:pu:gi	ムマヌカムの おかげで
11 jagumi kam umju:pu:gi	畏敬する 神の おかげで
12 jura-samai umju:pu:gi	お許し 下さる おかげで
13 kuga-samai umju:pu:gi	お解き 下さる おかげで
14 asa-ma-dama man-dza	アサマダマ（神名）の 万座（祭場）に
15 uja-ma-dama makja-du-n	ウヤマダマ（同上）の 牧お殿（同上）に

16	man-dza bai turju:i:	万座を りっぱに 整えて
17	makjadu bai pajuri:	牧お殿を りっぱに 整えて
18	ba-ga ni-futsi u-kui-ju	我が 始めた お声を
19	kam-mu dama ma-kui-ju	神の 分の 真声を
20	u-tumu jum tujuma	お供して 読んで 響もう!
21	u-tsiki jum mja:gara-di	お付き添って 読んで 見上げよう!

【語釈】○tindau「天道」。狩俣村の背後の旧脈上の一角に設けた石積みの拝所、またはその祭神。ここでは後者。この場所を mai-banada (前崖縁) ともいう。天上神が狩俣の地を往来する場所とされる。○umju:pu:gi 『混効験集』(乾・言語)に「おもぼけ たまもの 賜をいふ」とある。恩愛で、恩情で、恩寵で、の対訳も可能であろう。一説に「おかげです」、「ありがとう」(平良新亮)。○harari harari 囃子詞。祭場を浄めるのであろう。以下、各番の同じ位置でくり返される。なお、harai-guiの歌名はこの囃子詞に因る。○jagumju:i jagumi+ui。jagumiは畏れ多くも尊い〜、畏敬する〜、の意。uiは上、転じて神、の意。○ju:-mutu「四元」。狩俣の四大拝所。村立ての神 ni-dati-nusi (根立て主)、別称 mma-nu-kam (母なる神)を祭る upu-gufu (大城)、航海安全の神 tsikasa-gam (司神)を祭る na:ma (仲間)、豊穰神 ju:-nu-nusi (世の主)を祭る fidati (志立)、水の神 midzi-nu-nusi (水の主)を祭る na:mmi (仲嶺)の四拝所を指す。○ju:-nibi nibiは ibiともいう。ibiには慣例として威部の漢字を当ててきている。○mma-nu-kam「母の神」。母が信仰する神ではなく、母なる神。母神。天上界から娘神を連れてタバリ地に降臨し、神前に供える 桑水しとぎみずを求めて場所を西方(民俗方位)へ移動しながら、今の狩俣の地に辿り着いて村立したと狩俣村立ての神話では語り伝えている。村立ての神として狩俣の最高神。別称 ju:-tsiki (夜月)、ju:-tida (夜天太)、mma-tida (母天太)。○u-siba-nusi「お芝主」。mma-nu-kamがその降臨の際、連れていた娘神。神女たちが uja:n 祭祀の際、その身を草装・木装するのに用いる u-siba (お芝=蔓や木の枝葉)を司る神。nusiは神の同義語。別称 jama-nu-fufirai。母神 mma-nu-kamとの住まいを建てようと木を切り出しに山中へ入って怪我死したと語り伝えられている。○ma-kjan-nusi maは接頭語。kjanは、日常会話では kja:n と発音し、ここでは蔓や葛の総称。○tsikasa-gam「司神」。前記 na:ma-mutuの祭神、または同神に仕える神女。日常会話では tsikasa:n という。この harai-guiの歌い手。○wan tsikasa-gamの自称。○mattfa-gam 祭る神、の意か。○jura-samai 狩俣の拝所や祭祀はすべて、前記 mma-nu-kamの管轄下にある。そこで、ここではその神が「お許しくださるおかげで」と歌う。○kuga-samai 他の fusaでは pugasa-maiと歌う。ご了解くださる〜、の意。○asa-ma-dama「父真玉」。nisinja:-mutuの祭神。○man-dza 祭場。ここでは神女たちが輪舞をくり広げる nisinja:-mutuの前庭。一説に「満座」(奥濱幸子)。なお、輪舞の場、つまり円座の意とも考えられる。○uja-ma-dama「親真玉」。○makjadu maki+u-dunuであろう。makiは牧、転じて人里、村里、の意。u-dunuはお殿、転じて神の鎮まる場所、の意。○man-dza bai turju:i: manzaを祖神 uja:nたちの輪舞の場にふさわしく、りっぱに整えて(仮訳)。○makjadu bai pajuri: makjaduを祖神 uja:nたちの輪舞の場にふさわしく、華やかに整えて(仮訳)。○ba-ga ni-futsi u-kui 私が歌い始めた神歌 fusaの harai-gui。baは、ここ

ではこの harai-gui の歌い手である tsikasa-gam の自称。ni-futsi は「根口」で、転じて歌い始めた～、あるいは作詞・作曲の～、の意。○kam-mu dama ma-kui 神が歌う分としての harai-gui (仮訳)。dama は取り分、持ち分などの「分」に相当する。○u-tumu jum tujuma 母神 mma-nu-kam にお供して、神歌 fusa の harai-gui を歌い上げて、誉れとしよう (仮訳)。uja:n 祭祀では、神女たちは mma-nu-kam にお供するという形で行動するため、そう歌うのであろう。jum は、ここでは歌う、の意。tujuma は動詞 tujum の意志形。tujum は多義語であるため、ここでは「誉れとする」の意に解した。○u-tsiki jum mja:gara-di mma-nu-kam に随行して、神歌 fusa の harai-gui を歌い上げて、わが名を高めるとしよう (仮訳)。mja:gara は動詞 mja:gai の未然形。mja:gai は多義語であるため、ここでは「わが名を高める」の意に解した。di は助動詞で、動詞の未然形に付いて意志を示す。(野原優一先生の教えによる)

22	ŋkja-nu ta:ja jari-ba	昔の 通りで あるから
23	ni-dati mama jari-ba	根立ての ままで あるから
24	tudjaja:gi jari-ba	トゥデヤヤーギ (最終回) で あるから
25	nagu-ja:gi jari-ba	ナグヤーギ (同上) で あるから
26	uja-maga-ja jurusi	ウヤマガ (男の神役組織名) が 認可した
27	uja-bai-ja jurusi	ウヤバイ (同上) が 認可した
28	sima-nu-ni:-ja mutfu:ri:	スマヌニー (男の神役名) を 持って
29	fin-nu-ni:-ja dakju:ri:	フンヌニー (同上) を 抱いて
30	tiŋ-gara-nu pijui	天からの 吉日を
31	mandzara-ga nausi	万座からの 直る日を
32	sita-itu-n kumui	縦糸を 立てる ように (慎重に)
33	wa-itu-n sira-bi:	横糸を 調べる ように (慎重に)
34	jujum-samadi-ga:-jo	お読みなさるとよ
35	birju:m-samadzi-ga:jo	座して お読みなさるとよ

【語釈】○ŋkja-nu ta:ja jari-ba uja:n 祭祀は昔からそのままの行事なので (仮訳)。一説に「昔の力 (霊力) であるから」(新里孝昭、外間守善)。○ni-dati mama jari-ba uja:n 祭祀は村立ての頃からそのままの行事なので (仮訳)。nidati は村立ての頃、の意であろう。nidati-nusi は村立ての神。○tudjaja:gi uja:n 祭祀の第5回、つまり最終回の行事。既述のように、この神歌 fusa の harai-gui は uja:n 祭祀の第5回 tudja:gi (日常会話) という行事の5日目、pima-nu-manza (昼の万座) と称する一連の儀礼の中で、祖神 tsikasa-gam (司神) がその舞台の一つである nisinja:-mutu の前庭で他の祖神 uja:n たちの輪舞の中央に立って自分も舞いながら歌う。○nagu-ja:gi jari-ba 和やかにして、めでたい行事なので (仮訳)。○uja-maga 「親真頭」であろう。日取り役の pju:i-nu-fu: (日取りの主) と神歌 ni:ragu (fusa とは別ジャンル) の歌い手である2名の a:gufu: (歌主) から成る神役組織、またはそのメンバー。主な任務は、神くじを下ろして男女の神役を

選出したり、年間祭祀の実施に際して何か不都合が生じた場合に三名で協議してその最終判断を下したりする。日常会話では *uja-ma:ga* と発音する。○*jurusi* 許可した～。選出した～。○*ujabai* 「親栄え」。狩俣の祭祀世界で重要な任務を担う、華やかな神役組織、またはそのメンバー、の意であろう。○*sima-nu-ni*: 「島の根」。日取り役の *pju:i-nu-fu*: のこと。ここで *sima* は狩俣村のこと。*ni*: は中心、の意。日取りが決まらなると祭祀は出来ない、との考えが村人たちの間にはあろう。○*mutfu:ri*: 頂き持って。男性神役のトップに据えて。○*fun-nu-ni*: 「国の根」。fun は地域区分を示す単位、ここでは狩俣村。○*dakju:ri*: 抱くように守って。抱護して。○*tiŋ-garanu pijui* 天が定めた、あるいは天から授かった祭日。○*mandzara-ga nausi* 各祭場の神々から求めてくる良き日(吉日)。各祭場の神々が求める良き日。○*sita-itu-n kumui* 織物の経糸を張るように、それこそ慎重に。○*wa-itu-n sira-bi*: 織物の緯糸を整えるように、それこそ慎重に。○*jujum-samadi-ga*: 日読みをなさると。○*birju:m-samadzi-ga*: 座して日読みをなさると、の意か。

36	<i>uri-mumusu-kam-jo</i>	ウリムムスカム (神々の名) はよ
37	<i>uri-tudzira-kam-jo</i>	ウリトゥズラカム (同上) はよ
38	<i>sima-mutsi-du jari-ba</i>	島を 持つ ことであるから
39	<i>fun-daki-du jari-ba</i>	国を 抱く ことであるから
40	<i>ba-ga tukī-du jari-ba</i>	我が 時であるから
41	<i>kam-nu tukī nnaka</i>	神の 時の 真中に
42	<i>mai-banada u-dunu</i>	マイバナダ (拝所名) の 御殿で
43	<i>sima-daki-ga gjurui-n</i>	島抱き (同上) の 石積みで
44	<i>tada-nu pītu-tukī-n</i>	たった ひと時に
45	<i>kata-nu kata-tukī-n</i>	たった 片時に
46	<i>asi jurjai samai</i>	足を 寄せられて
47	<i>pisa jurjai samadzi-ga</i>	足裏を 寄せられると

【語釈】○*uri-mumusu-kam* 「降り百十神」。uja:n 祭祀では各回とも、草装・木装した祖神 uja:n たちが一列をなして聖林 *ni-sima* から人里 *nja:ku* に降臨する。その一行の呼名。転じて、uja:n 祭祀で一列をなして各祭場間を移動し、諸儀礼を行う祖神 uja:n たち。○*uri-tudzira-kam* 「降り十連れ神」であろう。○*sima-mutsi-du jari-ba* 狩俣村の維持、発展、再生を図るためであるので。○*ba-ga tukī-du jari-ba* 私が神歌 *fusa* を歌って務めを行う時間であるので (仮訳)。○*kam-nu tukī nnaka* 神の務めの途中で (仮訳)。○*mai-banada* 前記 *tindau* を参照。○*u-dunu* 神が鎮座する場所。神殿。○*sima-daki-ga* 狩俣村を抱護する～。○*gjurui* 石積み。一般には建造物を指す。○*tada-nu pītu-tukī-n* ほんの一時。しばらくの間。○*kata-nu* 前記 *tada-nu* に同じ。○*asi jurjai samai* 足を運ばれて。お立ち寄りになって。○*pisa* 足の裏。つま先。膝は誤訳。

48	jama-nu-fu:firai-ja	ヤマヌフシライ (神名) は
49	baka-bīri-nu ma-nusi-ja	若く 逝った 真主は
50	uri-mumusu-kam-nu	ウリムムスカムの
51	uri-tudzira-kan-nu	ウリトゥズラカンの
52	aka-nu kazi uika-u	頭の 数の 草冠を
53	dzidzi-nu kazi uika-u	頂の 数の 草冠を
54	tada-nu pitu-tuki-n	たった ひと時に
55	tada-nu kata-tuki-n	たった 片時に
56	u-siba baka-bīrafi:	お芝を 分け与えて
57	ma-kjan sīsa-murafi:	マキャンを 削ぎ与えて
58	baka-bīridi-gara-jo	分け与えてからよ
59	sīsa-muridi-gara-jo:	削ぎ与えてからよ

【語釈】○jama-nu-fu:firai「山で怪我して亡くなった神」の意という。前記 (p.175) の u-siba-nusi の別称。狩俣村立ての神 mma-nu-kam が天降りした時、連れていた娘神。ある日、母神 mma-nu-kam との安住の小屋を建てようと材木を切り出しに山中へ入って怪我死したと語り伝えられている。○ma-nusi 神の同義語。○aka 頭。髪の毛。○uika uja:n 祭祀の時、祖神 uja:n たちが被る草冠。○sīsa-murafi: きれいに削いで渡し～、の意か。

60	ni-dati-nusi-tujumja-ga	根立て主豊見親 (神名) が
61	jagumi upu-kam-jo	畏敬する 大神がよ
62	u-dunu damja: uma-mai	お殿矯めの フサは 読まれて
63	gjurai dami juma-mai	石積み矯めの フサは 読まれて
64	upu-ju:-dami-gami-jo	大世矯め (のフサ) までもよ
65	tira-ju:-dami-gami-jo	天太世矯め (のフサ) までもよ
66	pai-pai-n juma-mai	滞りなく 読まれて
67	mudi-mudi-n juma-mai	味わい深く 読まれて
68	juma-sama-di-gara-jo:	お読みに なってからよ
69	pira-sama-di-gara-jo:	お読み通してからよ
70	uri-mumusu-kam-ma	ウリムムスカムは
71	uri-tudzira-kam-ma	ウリトゥズラカムは
72	u-dunu-kara juī-di	御殿から 寄り出て……。
73	gjurai-kara juī-di	石積みから 寄り出て……。

(完)

【語釈】○ni-dati-nusi-tujumja ni-dati-nusi は村立ての神。tujumja は尊称。○u-dunu damja: 「お殿矯め」。mai-banada の神前で fusa を歌って行う神鎮めの祈願。○uma-mai 次に来る juma-mai に同じ。歌われて。お歌いになられて。○upu-ju:-dami-gami 豊作祈願の fusa まで（歌われて）。○tira-ju:-dami tira は「照ら」で、転じて太陽の意。作物の豊作は太陽の恵みであるとの認識に因るのであろう。○pai-pai-n juma-mai その場にふさわしく美しい声で見事に歌われて（仮訳）。○mudi-mudi-n 語義不詳。前後の文脈から判断して「味わい深く」の仮訳を当てた。○u-dunu-kara jui-di mai-banada のお殿を出て。

【解説】harai-gui（払い声）とは各番の終わりに「harari（払え！）harari（払え！）」という囃子詞が入ることに因る呼称である。歌い手の神女 tsikasa-gam（司神）は、その仕える同名の祖神 tsikasa-gam に成り代わって、つまり同神の化身として、この fusa を歌う。冒頭でも述べたように、uja:n 祭祀では神女＝祖神と見なされていたことから、この fusa の内容は、したがって主に祖神 uja:n たちの世界での出来事である。歌詞は大旨、次の内容段落に分けることが出来よう。

第1段落（番号1—同21）：天上界と狩俣の地をつなぐ tindau 聖地（天の道）に鎮座する神のおかげで、狩俣にある4つの mutu（元＝拝所）のうち na:ma-mutu（仲間元）の祭神となった自分、村立ての神 mma-nu-kam（母なる神）とその連れていた娘神 u-siba-nusi（お芝主）のおかげで tsikasa-gam（司神）となった自分、さて私は mma-nu-kam の許しを得たので、同神にお伴して、ここ——asa-ma-dama（父真玉）という神を祭る nisinja:-mutu（西の家元）という拝所——の前庭で祖神 uja:n（親神）たちの輪舞の中央に立って、私が過去に歌い始めた神歌 fusa を歌って誉れとしようとう歌う。

第2段落（番号22—同35）：昔から続いてきた tudja:gi（最終回）の行事ということで、——狩俣の祭祀世界で最高位に立つ uja-ma:ga（親真頭）たちが神くじで選出した——pju:i-nu-fu:（日取りの主）を中心に、慎重に uja:n 祭祀の日取りをしたことを歌う。

第3段落（番号36—同47）：狩俣村を維持し、その発展、再生を図る祈願のために、あとで祖神 uri-mumusu-kam（降り百十神）に化身する神女たちが、まず村の背後の聖地 mai-banada（前崖縁）に集合したことを歌う。

第4段落（番号48—同59）：その場所で神女たちが、祖神 jama-nu-fufirai（山で若死にした神）、別称 u-siba-nusi（お芝主）から蔓などを受け取るとそれで草冠を作って被り、先の uri-mumusu-kam に化身したことを歌う。

第5段落（番号60—同69）：マイバナダで、村立ての神 nidati-nusi-tujumja（根立て主豊見親）が「お殿矯め」（神鎮め）の神歌 fusa を歌ったことを歌う。

第6段落（番号70—73）：そのあと、uri-mumusu-kam の一行が mai-banada を出たことを歌う。

## 2. ja:kja-gui（富貴声）

74 a: usi-na ufi: mmjai  
ja:jaki-ja:

ああ 押しに 押し 来られて  
富貴、富貴だよ！

75	a:	nuĩ-na nu:ri: mmjai-di-ga	ああ 乗りに 乗り 来られると
76	a:	upu-dza: uparudzi	ああ 大座の ウパルズ (神名) が
77	a:	isu-dza: kamjarudzi	ああ 豊漁座の カミヤルズ (同上) が
78	a:	nara dijo:-samai	ああ 本人が 出られて
79	a:	kan dijo:-samai	ああ 神が 出られて

【語釈】○ja:kja-gui「富貴声」。豊穰祈願の神歌 fusa。○a: 歌い出しの掛け声。○usi-na ufi: mmjai uri-mumusu-kam (降り百十神) の一行が先の maibanada (前崖縁) を出て、村の広場 upu-dza: (大座) に降りてくる様子を歌う。○ja:jaki-ja: jaki (富貴) + jaki (富貴) + ja: (よ) であろう。囃子詞。以下、各番の同じ位置でくり返される。なお、ja:kja-gui の呼称はこの囃子詞に因る。○uparudzi「大主」。前記 upu-za: の祭神。○isu-dza:「豊漁座」。upu-za: の褒め言葉であろう。○kamjarudzi「神主」。○nara dijo:-samai 大主神が自ら外へ出てこられて、mai-banada から降りてくる uri-mumusu-kam の一行を出迎えたということであろう。

80	a:	uri-mumusu-kam-ma	ああ ウリムムスカム (神々の名) は
81	a:	uri-tudzira-kam-ma	ああ ウリトゥズラカム (同上) は
82	a:	tfo:-nna pai-du	ああ (神の) 帳簿には 栄えて
83	a:	tigami-nna pai	ああ 手拝み (同上) には 栄えて
84	a:	ɲkja-nu taja samai	ああ 昔の 通り なされて
85	a:	ni-dadi mama samai	ああ 根立ての まま なされて
86	a:	tumu-ja:-ga naka-n	ああ 泊屋の 中に
87	a:	jatjuĩ-ga naka	ああ 宿りの 中に
88	a:	tumu-ja-dami samai	ああ 泊屋矯めをなさって
89	a:	jatui-dami samai	ああ 宿り矯めをなさって

【語釈】○tfo:-nna pai-du 神の帳の定めに精通して (仮訳)。○tigami-nna pai 手拝みに精通して (仮訳)。○ɲkja-nu taja samai 昔の通りに祈願なされて。○tumu-ja: 村の広場 upu-dza: に建つ祭祀小屋。神女たちが一晩、そこに籠もることがある。○tumu-ja-dami 泊屋の中で行う神鎮めの祈願。fusa を歌ったかどうかは定かでない。

90	a:	jama-nu-fu:firai	ああ ヤマヌフシライ (神名) は
91	a:	jama-nu-itsu ○	ああ ヤマヌイツ (同上) [聴取不能]
92	a:	nara-do: kaki samai	ああ 自分で 神衣を掛けなさり
93	a:	kam-do: kaki samai	ああ 神自身で 神衣を掛けなさり
94	a:	manuka-mai umju:pu:gi	ああ 招いて 下さる おかげで

95 a:	juruba-mai umju:pu:gi	ああ 寄って 下さる おかげで
96 a:	uri-mumusu-kam	ああ ウリムムスカムは
97 a:	uri-tudzira-kam	ああ ウリトゥズラカムは
98 a:	tumu-ja-kara juïdi-samai	ああ 泊屋から 出られて
99 a:	jatui-kara juïdi-samai	ああ 宿りから 出られて

【語釈】○jama-nu-itsu jama-nu-fu:firai の別称であろう。itsu は稜威、の意か。○nara-do: kaki samai 自分から先に草冠を被られて(仮訳)。○manuka-mai umju:pu:gi お誘いするおかげで(仮訳)。席を立つよう促したということであろう。○juruba-mai umju:pu:gi お寄りになって声かけをしたので(仮訳)。

100 a:	tsikasa suwari:	ああ ツカサ(神名)は 座り
101 a:	ju:-dajo: suwari:	ああ 世力(同上)は 座り
102 a:	subagi-nu kam	ああ スバーギヌカム(神名)は
103 a:	kanja:gumi kam	ああ 神として 尊い 神は
104 a:	mtsi-piki masari	ああ りっぱに 道引きを して
105 a:	tu:-piki masari	ああ りっぱに 通り引きを して
106 a:	o:-jama-n badari	ああ 青山(森名)に 渡って……。
107 a:	furu-jama-n batari	ああ 黒山に 渡って……。
108 a:	mumu-mui batari	ああ 百森に 渡って……。
109 a:	mumu-taki batari	ああ 百嶽に 渡って……。

(完)

【語釈】○tsikasa suwari: 聖林 ni-sima に籠もる祖神 uja:n たちとは別に、人里 nja:ku (宮古) の nisinja:-mutu (西の家元) に籠って待機しながら、同 uja:n たちと連絡を取り合って行動を共にする、これは nja:ku-nu-uja:n (宮古の祖神) と称するグループがいる。tsikasa (司) はそのリーダー役で、ここでは同神が小屋の入り口に座って、中から uri-mumusu-kam の一行が出て来るのを待っていた、ということであろう。なお、tsikasa はこの fusa の歌い手 tsikasa-gam とはその呼称が類似するが、両者の関係がどうなのかは今後の検討課題。○ju:-dajo: 前記 tsikasa の別称。○subagi uri-mumusu-kam の一行の先頭に立って道案内役を務める nja:ku-nu-uja:n。日常会話では suba:gi という。○kanja:gumi kan kanja:gumi は kan (神) + jagumi (畏敬する) であろう。神として尊い役目を担う神。subagi の神を立てた言葉。○mtsi-piki masari 道案内を滞りなく務めて。○o:-jama 緑陰に映える山。一説に「大いなる山」(平良)。狩俣村の背後の聖林 fum-mui (国森) を指すのであろう。○furu-jama 樹木が生い茂って、昼でも薄暗い感じの山。一説に「古からの山」(平良)。○mumu-mui batari 森の数々を渡り歩いて。

【解説】 ja:kja-gui (富貴声) とは各番の終わりに ja:jaki-ja: (富貴、富貴だ!) という囃子詞が入ることに因る呼称である。ここでも歌い手の神女 tsikasa-gam (司神) は、その仕える同名の祖神 tsikasa-gam に成り代わって、つまり同神の化身として、この fusa を歌う。冒頭でも述べたように、uja:n 祭祀では神女=祖神と見なされていたことから、この fusa の内容は、したがって祖神 uja:n たちの世界での出来事である。歌詞は大旨、次の内容段落に分けることが出来よう。

第1段落 (番号74-同89) : 聖所 mai-banada を出た uri-mumusu-kam (降り百十神) の一行が、村の広場 upu-dza: (大座) に降りてきてそこの祭神 uparudzi (大主) の出迎えを受けたこと、upu-dza: に建つ祭祀小屋の中へ入って「泊矯め」(家鎮め) の祈願をしたことを歌う。

第2段落 (番号90-同99) : 祈願が終わると jama-nu-fufirai (山で事故死した神) が立ち上がって草冠を被り、一行に退席を促すので、そこで一行が小屋から外へ出たことを歌う。

第3段落 (番号100-同109) : 小屋の戸口には nja:ku-nu-ujai:n である tsikasa (司) と同 suba:gi (側上げ=道案内役の神) が座すと待機していて、あとは suba:gi を先頭に立てると一行は山中へ入り、各森・各嶽を巡拝しながら聖林 ni-sima (根島) に入ったことを歌う。

### 3. na:bi-gui (窄め声)

110 a: usi-na ufi mmjai	ああ 押しに 押し 来られて
111 a: nu:-nna nu:ri mmjai	ああ 乗りに 乗り 来られて
112 a: tujagi-du jari-ba	ああ トウヤギ (最終回) で あるから
113 a: naku-jagi-du jari-ba	ああ ナクヤギ (同上) で あるから
114 a: uri-mumusu-kam	ああ ウリムムスカム (神々の名) は
115 a: uri-tudzira-kam	ああ ウリトウズラカム (同上) は
116 a: o:-jama-ga ui-n	ああ 青山の 上に
117 a: furu-jama-ga ui-n	ああ 黒山の 上に
118 a: mumu-mui-ga ui-n	ああ 百森の 上に
ja:kja	富貴だ!
119 a: mumu-taki ui-n	ああ 百嶽の 上に
120 a: pi:-ga itsi-ka nai-kja:	ああ 日が 五日に なるまで
121 a: ju:-ga-pu: ntii-kja:	ああ 世果報が 満ちるまで
122 a: kam-ma bada dagiri	ああ 神は 空腹を 抱えて
123 a: kam-ma bada dagiri	ああ 神は 空腹を 抱えて
124 a: asatja:-n basiri	ああ 朝茶も 忘れ
125 a: ju-n-tja:-n basiri	ああ 夕の 茶も 忘れ
126 a: upu-sikama turjagi	ああ 大仕事を やり遂げて
127 a: upu-dai turjagi	ああ 大祭を やり遂げて

128 a:	ami-futu-n auti	ああ 豪雨に 遭って
129 a:	kadzji-fuki-n auti	ああ 台風に 遭って
130 a:	tubi-fukju: kam-ma	ああ 吹き飛ばされて いる 神は

【語釈】○na:bi-gui 唇をやや窄めて低い声で歌うことに因る呼称だという。なぜ、そう歌うのかは聞き取っていない。○tujagi uja:n 祭祀の第5回、つまり最終回の行事。前記(p.177)の tudjaja:gi に同じ。祖神 tsikasa-gam がこの fusa を歌うのは、この行事の最終日の昼、nisinja:-mutu の前庭においてである。○naku-jagi 前記(p.177)の nagu-ja:gi に同じ。○ja:kja 豊穰だ！この場面で祖神 uja:n たちが一度だけ発する。○pi:-ga itsi-ka nai-kja: 5日間に亘り。○ju:-ga-pu: 「世果報」。作物の豊穰や富、またはそれに恵まれること。○kam-ma bada dagiri uja:n 祭祀では、神女たちは空腹に耐えて所定の儀礼を実施するのであろう。○tubi-fukju: kam 激しい風雨の中、その務めのためにあちこち飛び回っている祖神 uja:n たち。

131 a:	kju:-ga ui-n	ああ 今日の 上に
132 a:	kju:-na ui-n	ああ 今日の 上に
133 a:	mandzara-ga pijui	ああ 万座からの 吉日
134 a:	makedza-dun nausi	ああ 牧お殿の 直る日
135 a:	tsikasa mmi	ああ ツカサ(神名)の 群は
136 a:	ju:-dam mmi	ああ ユーダム(同上)の 群は
137 a:	banu-n jagumisa-n	ああ 我が 尊さに
138 a:	kan-nu ukagisa-n	ああ 神の おかげに
139 a:	asa-kata-ja sadami	ああ 朝方を 定め
140 a:	pja:si sadami	ああ 早朝を 定め
141 a:	tida-nnaka-gami	ああ 正午まで
142 a:	pi-nu-nnaka-gami	ああ 真昼まで
143 a:	jusarabi-gami	ああ 夕方まで
144 a:	jufimi-ŋ-gami	ああ 夕暮れまで
145 a:	tfo: tui-samai	ああ 帳を 取りなさり
146 a:	tikami tui-samai	ああ 手拝みを 取りなさり

【語釈】○kju:-ga ui-n ui は、ここでは kju: (今日) を取り立てて、その日が特別の日であることを表す言葉。○mandzara-ga pijui 万座の神々が求める吉日。○tsikasa mmi 前記 tsikasa (司) を中心とした nja:ku-nu-uja:n (宮古の祖神) たち。mmi は複数を表す言葉「~たち」に相当。○ju:-dam 前記 ju:-daja に同じ。○banu-n jagumisa-n 私に対する畏敬心から(仮訳)。○tida-nnaka 「太陽真ん中」。真昼。正午。○pi-nu-nnaka 「日の真ん中」。○tfo: tui-samai 神の帳に定めた通り、uja:n 祭祀の務めをなさって(仮訳)。

147 a:	uri-mumusu-kam	ああ	ウリムムスカムは
148 a:	uri-tudzara-kam	ああ	ウルトウズラカムは
149 a:	tʃo:-nna pai-samai	ああ	帳の ために 栄えなされて
150 a:	tikami-nna pai-samai	ああ	手拝みに 栄えなされて
151 a:	o:-jama ui-kara	ああ	青山の 上から
152 a:	furu-jama-ga ui-kara	ああ	黒山の 上から
153 a:	mumu-mui ui-kara	ああ	百森の 上から
154 a:	mumu-taki ui-kara	ああ	百嶽の 上から
155 a:	usi-na ufi: mmjai	ああ	押しに 押し 来られて
156 a:	nu:i-na nu:ri mmjai	ああ	乗りに 乗り 来られて
157 a:	asa-ma-dama man-dza-n	ああ	アサマダマ (神名) の 万座に
158 a:	uja-ma-dama man-dza-n	ああ	ウヤマダマ (同上) の 万座に
159 a:	pīsara sīdzi-kui-ju	ああ	窄め口の 鈴声を 歌って
160 a:	ma:ni sudzi-kui-ju	ああ	丸め口の 鈴声を 歌って
161 a:	asi-bara-nu idii-kja:	ああ	足に 凝りが できるまで (舞って)
162 a:	pīsa-bara-nu idii-kja:	ああ	足裏に 凝りが できるまで (舞って)
163 a:	fa:-maga-nu mmi-n	ああ	ファーマガ (氏子) の 群に
164 a:	mumu-pai-nu mmi-n	ああ	ムムパイ (同上) の 群に
165 a:	ugam-bai turasi	ああ	りっぱに 拝ませて やる。
166 a:	ugam-sīdzi turasi	ああ	華やかに 拝ませて やる。

【語釈】○asa-ma-dama man-dza asa-ma-dama (父真玉) という神を祭る nisinja:-mutu。asa は父の親族名称。○uja-ma-dama 「親真玉」。uja は父の親族呼称。○pīsara sīdzi-kui 歌名の na:bi-gui に同じ。○asi-bara-nu idii-kja: 足がすっかり疲れるまで。asi-bara は足に出来る凝り、または疣。○pīsa-bara 足の裏に出来る凝り、または疣。○fa:-maga 「子孫」。各 mutu の子孫に当たる氏子 (延いては村人)。○mumu-pai 各 mutu の氏子 (あるいは村人) たちを、一本の樹木から出た無数の枝に喩える。○ugam-bai turasi 氏子たちの参拝を受けたということだが、それを「りっぱに拝ませてあげる」(仮訳)と歌う。○ugam-sīdzi sīdzi の語義不詳。前後の文脈から判断して「華やかに」の仮訳を当てた。ugam-siki と歌う、他の神歌もある。

167 a:	kju: naui	ああ	今日の 直る日
168 a:	tsikasa-gam wan-na	ああ	ツカサガム (神名) の 我は
169 a:	mattʃa-gam wan-na	ああ	マツチャガム (同上) の 我は
170 a:	mma-nu-kam umju:pugi	ああ	ムマヌカム (神名) の おかげで
171 a:	jagumi kam umju:pugi	ああ	畏敬する 神の おかげで

172 a:	juru-samai umju:pugi	ああ お許しなさる おかげで
173 a:	kuga-samai umju:pugi	ああ お解きなさる おかげで
174 a:	asa-ma-dama man-dza	ああ アサマダマ (神名) の 万座で
175 a:	uja-ma-dama makja-du-n	ああ ウヤマダマ (同上) の 牧お殿で
176 a:	man-dza bai turjuri	ああ 万座を りっぱに 整えて
177 a:	makja-du bai pajuri	ああ 牧お殿を りっぱに 整えて
178 a:	ba: ni-futsi kui	ああ 我が 始めた 声を
179 a:	kam-mu dama ma-kui	ああ 神の 分の 真声を
180 a:	u-tum jum tu:-tan	ああ お供して 読みあげた。
181 a:	u-siki jum u-tan	ああ お付き添って 読み上げた。
182 a:	ŋkja-nu taja tu-tan	ああ 昔の 通り 読み上げた。
183 a:	ni-dati mama jun-tan	ああ 根立ての まま 読み上げた。

(完)

【語釈】○u-tum jum tu:-tan u-tum は前記 (p.176) の u-tumu に同じ。母神 mma-nu-kam に  
お伴して、nisinja:-mutu の神歌 fusa を滞りなく歌い上げた (仮訳)。○u-siki 前記 (p.176) の u-  
tsiki に同じ。

【解説】na:bi-gui (窄め声) とは、歌い手が唇をやや窄めて低い声で歌うことに因る呼称だという。  
ここでも歌い手の神女 tsikasa-gam (司神) は、その仕える同名の祖神 tsikasa-gam に成り代わって、  
つまり同神の化身として、この fusa を歌う。冒頭でも述べたように、uja:n 祭祀では神女=祖神と  
見なされていたことから、この fusa の内容は、したがって祖神 uja:n たちの世界での出来事であ  
る。歌詞は大旨、次の内容段落に分けることが出来よう。

第1段落 (番号 110—同 130) : 山中へ入った uri-mumusu-kam (降り百十神) の一行が、uja:n 祭  
祀の第5回 tudja:gi (最終回) の行事だということで、5日間も空腹に耐えながら風雨の中を  
走り回り、その務めを果たしたことを歌う。

第2段落 (番号 131—同 146) : 一方、今日は uri-mumusu-kam の一行が人里 nja:ku (宮古) の万  
座に降りるということで、昼夜 nisinja:-mutu に控える nja:ku-nu-uja:n (宮古の祖神) たちが揃っ  
て、——私たち uri-mumusu-kam に対する畏敬の念から——朝・昼・晩と出迎えに来たことを歌  
う。

第3段落 (番号 147—同 166) : uri-mumusu-kam の一行が、asa-madama を祭る nisinja:-mutu に降  
りてきて、そこの前庭で祖神 tsikasa-gam が歌う na:bi-gui に合わせて、足に凝りが出来るまで  
輪舞していること、そこへ村人たちが参拝にやってきたことを歌う。

第4段落 (番号 167—同 183) : 今日の良き日、祖神 tsikasa-gam の私は——母神 mma-nu-kam の  
お許しを得て——asa-madama を祭る nisinja:-mutu の前庭で祖神 uja:n たちの輪舞の中央に立  
つと神歌 fusa を昔から伝わった通りに歌い上げたことを歌う。

## ※

以上、harai-gui (払い声)、ja:kja-gui (富貴声)、na:bi-gui (窄め声) という三編一組の神歌 fusa (草) を紹介したが、三編はもちろん、それぞれ曲は違うものの、全体としてみると各 fusa の解説でも明らかにしたように、内容上は繋がっている。くり返すことになるが、harai-gui では歌い手の tsikasa:n (司神) が名乗りをしてその神性を明かしたあと、この fusa を歌うことを宣言する。そして、日取り役 pju:i-nu-ju: (吉日の主) を中心に uja:n 祭祀の日取りをしたこと、その第5回 tudja:gi (最終回) という行事に当たり、各神女が自宅を出て mai-banada (前崖縁) という高台の聖地に集まるとそこでは草装・木装して集団で行動する祖神 uri-mumusukam (降り百十神) となり、神前で fusa を歌って祈願したことを歌う。ja:kja-gui では、その uri-mumusukam の一行が mai-banada を出て村の広場 upu-dza: (大座) に降りるとそこでも祈願したこと、——fusa を歌ったかどうかは明らかでない——そのあと一行は、道案内役の suba:gi (側上げ) に導かれて聖林 ni-sima (根島) に入ったことを歌う。na:bi-gui では、ni-sima に入った uri-mumusukam の一行が森々・嶽々を訪ねて各所で苦行ともいふべき務めをしたこと、そして今日は、朝・昼・晩と tsikasa (司) たち——人里の nisinja:-mutu (西の家元) に控える nja:ku-nu-uja:n (宮古の親神) たち——が ni-sima まで出迎えに来て、それで uri-mumusukam の一行が人里に降りて nisinja:-mutu の前庭で fusa を歌って輪舞していること、そこへ氏子 (あるいは村人) たちが参拝に来ていることを歌う。そして最後は、この na:bi-gui の終了宣言である。こうして三編の fusa の内容をつないでみると、三編は一組となって uja:n 祭祀の第5回 tudja:gi (最終回) という行事の準備、実施、終了までの全過程を連続して歌い上げていることに気づくであろう。なぜ、そうした内容を歌うのかと言えば、ここで fusa が一般に祖神 uja:n たちから神女 uja:n (延いては村人) たちへのお告げ (託宣) であることに留意したい。つまり、この三編一組の fusa は、第5回 tudja:gi (最終回) という行事の全過程を手順通りに歌い上げることによって、その行事の世代間継承を図り、永続的实施を村人へ求めているとみることが出来よう。三編の fusa とも歌詞は一見複雑で、かつ難解に思えるが、以上のように解釈することによって、その祭祀歌謡としての役割と機能が見えてこよう。狩俣の uja:n 祭祀は5回に及ぶ行事であり、各行事を通して数々の fusa がそれぞれ特定の歌い手によって歌われているが、この三編から成る nisinja:-mutu-nu-fusa については、とりあえず以上の解説をもって稿を閉じることにする。

【採集】この nisinja:-mutu-nu-fusa は1970年前半、筆者が uja:n 祭祀の現場でカセットテープに録音し、後日歌詞を文字化したものである。

【参考文献】①外間守善、新里幸昭編『南島歌謡大成Ⅲ 宮古篇』(昭和53年6月30日、株式会社角川書店)。②平良市史編さん委員会編『平良市史第七巻資料編5 (民俗・歌謡)』(1987年、平良市教育委員会)。同書にはニスニャー・ムトゥのフサの神歌名で、狩俣出身の平良新亮氏の原稿が掲載されている。③奥濱幸子著『祖神物語 琉球弧 宮古島 狩俣 魂の世界』(2016年、出版社 Mugen)。

(もとなが・きよし)

